

ずいぶん勉強されている。「ゆく秋の……」から西の京の話が弾む。風のように来て、たくさんの草木を植え、風のように去って行った方もいる。石かげの春蘭、築山の一重山吹、西裏の芹、雪の下等々全部活着に頭が下がる。きつと植物愛の深い方と思う。

大樹の桜、生家の連子から舞い込んだ花びらは、うす暗い土間や畳に美しかった。女の人が側にいると早く咲くのですよ、と云われた人もなつかしい。

「わがまま児時々ここに入れられし幼な思ひ出ををさめたる土蔵」

毎日見慣れた厚い重い扉。傍らの塀が初めて実を降らせた。拾い上げる掌に過ぎた歳月への惜情がすっしりと重い。

四季折々に石薬師の人達がお花をお持ち下さる。いつも通る道辺のように、ある時は振り向かせ、ある時は何気なく通り過ぎる。そんな朝剪りの花がやさしい心と共に今日も届いているでしょう。

(前・佐佐木信綱記念館職員)

ごくろうさまでした

石井 平

昭和六十一年五月の資料館オープン以来、館の仕事に携ってこられた加藤弘子さんが、今年の三月末でお辞めになりました。誠実で暖かい人柄は、地元の方々はもちろん全国各地からの来館者に親しまれました。長い間ご苦勞さまでした。

(文化財保護課課長)

編集机から

◇信綱は、『倉倉録』の中で「歌はまことの聲である。まごころからあふれ出す聲である。歌は魂の聲である。魂の底からほとばしり出す聲である。歌は心の花である。花なき園はさびしい。心の園に花のないのはさびしい。歌は心のうるほひである。また心の糧である。」

◇また、『統倉倉録』の中で、「自分が竹柏会を興した明治中期の頃の歌は、題材はきわめて狭く、内容も浅く、かつ限られたものであった。それを改革する意味で、自分は『広く、深く、おのがじしに』といふことを、この道の標語にした。『おのがじしに』とは、個性の動くままにといふほどの意である。自分は、現在及び将来の歌壇に向っても、等しく『おのがじしに』といひたい。口語歌、定型を破った歌、新しい思想的短歌、新芸術派短歌など、それぞれに存在してよいのである。」

百年後、令孫幸綱先生が平成の短歌革新の魁となっていられる姿を見る時、私はそこに佐佐木家の血の流れを思わずにはいられない。

◇釈退空、本名は折口信夫(オリグチシノブ)。国文学研究に民俗学的方法を導入した先駆者であり、歌集『春のことぶれ』等、人生の寂寥をかそく詠じた歌人としても名高い。退空賞はその高弟角川源義によって制定され、歌壇最高の名誉とされる。

◇写真の信綱像は、昭和七年、還歴を祝って門人知友から贈られた書庫一万葉蔵(西園寺公望執筆)書齋で。

(文化財保護課 辻 正)



目次

| | |
|---------------|-------|
| 「瀧の時間」と信綱 | 佐佐木幸綱 |
| 信綱一首(八) | 村田 邦夫 |
| わたくしの「瀧の時間」一首 | 石薬師歌会 |
| 歌ありてー思い出すこと | 加藤 弘子 |
| 編集机から | 辻 正 |

| | |
|-----------------|------------------|
| ・鈴鹿市教育委員会文化財保護課 | TEL・〇五九三・八二・九〇三二 |
| ・鈴鹿市神戶九一 | 二一・二五 |
| ・佐佐木信綱資料館 | TEL・〇五九三・七四・三二四〇 |
| ・鈴鹿市石薬師町一七〇七 | 千五二一三 |

『瀧の時間』と信綱

佐佐木 幸綱

私の七番目の歌集『瀧の時間』が、第四十回の退空賞を受賞した。

じつは、信綱と退空とは対立関係にあった。仲が悪かったのは有名な話である。角川書店の雑誌「短歌」に書いた「受賞のことば」の中で、私はあえてそのことに触れておいた。

信綱も退空も、個性的な人物だった。頑固な人物だった。芸術家にあつては頑固は勲章である。この二人が、妥協せずに対立したのは当然じゃないか。

退空賞を信綱の孫である私が受賞するということは、信綱・退空の対立を、私的な対立ではなく芸術家同士の対立であると私たちの時代が認めることになるだろうし、私個人の問題としては、明治・大正・昭和を生きたこの二人の先輩の、「個性的であれ!」「頑固であれ!」との教えをわ



昨年12月、信綱顕彰歌会で講演される幸綱先生

がものとしよう、との無言の発言になるだろう。そんな思いが私にはあつた。さて、その『瀧の時間』には、信綱の名前が三首に出てくる。その三首について書かせていただくことにしよう。

近くて遠き謎なる信綱生れし家に信綱を知らぬ若者ら満つ

きりぎりす夜空に冴ゆれ「信綱と酒」なるエッセイ書き終えて酒

壁にかかれる信綱六十歳の顔の黒くまあるき眼鏡見つ語る

これまで私は「海にうたえば」という信綱への挽歌、「信綱のこと」という親・子・孫・曾孫をつたつた連作など、幾つか短歌作品による信綱論を書いてきたが、『瀧の時間』における「信綱」は、主題というよりは点景として登場し

ており、それだけに、まあ、私個人としてのプライベートな感慨がより露出している作かと思う。

一首目は、「心の花」の全国大会が鈴鹿で開催されたときの作で、参会者たちが「佐佐木信綱記念館」「同資料館」を訪問・見学したおりのスナップ写真のような作である。石



「壁にかかれる…」の信綱像
(絵は向井潤吉画伯)

葉師歌会のメンバーや村田邦夫氏らが入念な準備を下さったので、みな、両館を大いに堪能したのだが、ふと気づくと、信綱を直接知っている者は少数であり、信綱が他界した昭和三十八年以後

生まれの「心の花」会員も相当数にのぼる。私にとつての信綱、彼らにとつての信綱……。彼らにとつても私にとつても信綱は「近くて遠き謎」ではないのか。

二首目は、佐々木久子さんの「酒」という雑誌に信綱のことを書いたときのことをうたっている。晩年の信綱が好んだワイン、卯酒などについて書いたような記憶がある。三首目は、「佐佐木信綱顕彰歌会」の講演の取材した作で、資料館二階の絵をご存知の方は「ああ、あれか」と思い当たられるだろう。作者としては「黒くまあるき」の部分、とくに「まあるき」のあたりに、多少、工夫のあ

る歌ということになろうか。眼鏡のデザインは時代を象徴する。「まあるき」には昭和初年という時代に対する現代からの批評をこめたつもりである。

(早稲田大学政経学部教授・『心の花』編集長・朝日歌壇選者)

わたくしの『瀧の時間』一首

石葉師歌会

大森美枝

土牛という名前の厚み字の重み世を発ちにきと新聞は書く

昭和三十七年、文化勲章を受賞された奥村さんの父親は、その画号を「土牛」と選ばれたそう。『土牛、石田を耕す』という寒山詩の一節からとられたもの。

心の赴くまま、自分の絵一筋の道をつらぬかれ、百歳を越えてなお、車椅子にのり、近くの風景を眺めていられたテレビ画面のお姿を思い出す。

桑原和子

近くて遠き謎なる信綱生れし家に信綱知らぬ若者ら満つた先生なのだ。これほど故郷を想い、ふるさと人を大切に懐かしがってくださった信綱先生、いつも紋付袴に白足袋

信綱一首・8

山は水はうつくしきかも 衷たごころ憎める人を
昨日きのふは持ちし

昭和十一年(一九三六)刊第六歌集『椎の木』、六五歳。「折々のうた」で大岡信氏が「この巨匠にして、かかる経験も人並みにあつたらしい」というのは浅い。謹直な温容と柔和な伊勢訛との底に、激しい怒りと憎しみを深く秘めていた。令孫幸綱氏の言われる頑固な個性、釈迦空(折口信夫)も同じである。(村田邦夫)

のお姿であつたけれど、常に新しい思想の持主でもあられた。その古い家に、いま、若者らが満ちている。亡き先生のお心を偲ぶとき、私の心は喜びにふるえてくる。

山中 功

秋のはえ秋の日ざしに濡れつつ恍惚とわが歌稿の上に

陽光の射し込む窓辺であろうか、信綱先生の歌稿をまぶしく、そして、その上をなめるように、うっとりとして読んでいるのか。動きのふい秋のはえよ。

「やれ打つな 蠅が手をする足をする」一茶のハエとは誠に対称的だ。

歌ありて——思い出すこと

加藤 弘子

「願はくはわれ春風に身をなして憂ある人の門をとはばや」と書かれた石葉師小学校の衝立へ、京都の方をご案内する。校庭一面、藪が固く干上って大変歩きづらい。

足下を氣遣う私に「まあ、とても美しい凸凹なこと。」

私は言葉を失う。その時は、その人の初老の心のゆとりと思い、今は若々しい心のしなやかさと思う。

三月、朝から強い風が吹き荒れる。こんな中をこ来館くださる方がある。「黄砂が来ていますよ。」目を閉ざして吹きすさぶ風の中、ゆっくりと歩いて帰られるグスターを見送る。生家の廊下を拭くと、雑巾は薄黄の粉にまみれた。「真白帆によき風みてて月の夜を夜すがら越ゆる洞庭の湖」

(中国湖南省)

女子大生だろうか、お帰りの清やかな会釈に、レモン一顆置かれた思いがする。芳名簿の「柏木薫」にしばし夢のよう。

庭木の中で、卵の花は別格として、人々を最も魅するのは御柳(ギョリュウ)は和名。落葉の小高木で中国が原産。春夏の二季、淡紅色の細花が総状に密生する。漢名は檉柳。緑も桃色も霧うように淡く、かそかな風に揺らぐ。

「鉢の御柳古りたる幹のしだり枝の細花老の夢にかも似て。」琴歌「大和の春」の演奏を前にとゆっくり見学される方。